

1 研究主題

高校生の「読むこと」「書くこと」における 英語コミュニケーション能力に関する実態調査研究

<内容の要約>

本研究は、高校生の「読むこと」「書くこと」における英語コミュニケーション能力に関する実態や課題を明らかにしようとしたものである。その結果、長い英文を読み、概要をまとめる力が不足していること、「指示に従って情報を伝えること」に積極性が見られる反面、「テーマに沿って自分の考えを伝えること」が不十分であることが分かった。これらを改善するためには、「運用できる語彙力の増強」、「文の組立に関する規則への習熟」に留意しながら、自己表現させる活動を積極的に取り入れることが必要であると考えられる。また、分析的評価法により、生徒の実態をより詳しく把握できた。分析的評価法は、生徒の到達度に応じた指導を行う上で効果的である。

<キーワード>

(1)高等学校英語 (2)「読むこと」「書くこと」 (3)コミュニケーション能力 (4)分析的評価法

2 主題設定の理由

平成10年に出された教育課程審議会答申では、国際化への対応をこれからの教育課題の一つに挙げている。さらに、平成15年度から実施される新学習指導要領（以下、新学習指導要領）では、外国語が必修教科になり、国際社会で世界の人々と協調し、積極的に外国語でコミュニケーションを進めていくことができる資質や能力を養成することが、なお一層求められている。急速な国際化に対応するために、異文化間コミュニケーションの媒体としての英語の重要性は今後ますます高まっていくと考えられる。

国際化社会で求められているコミュニケーション能力とは、単に英語の文法規則や語彙などについての知識があることだけでなく、実際に情報や考えを授受することを目的として英語を運用することができる実践的コミュニケーション能力である。コミュニケーションの手段としては「聞くこと」「話すこと」の音声面が重視されがちであるが、コンピュータの普及等を考慮すれば、文字を媒介とした「読むこと」「書くこと」によるコミュニケーションも、今後ますます重要になってくると思われる。例えば、必要な情報や書き手の意向などを読み取って理解したり、自分の考えを書いて表現したりして読み手と通じ合えるコミュニケーションタイプ、インタラクティブな能力が求められる。また、生徒がインターネットで情報を検索したり、E-mailで相手と情報交換をしたりするなどの活動が今後は増えてくると考えられるため、「読むこと」「書くこと」における実践的コミュニケーション能力を育成するための指導方法の工夫・改善が求められる。

そこで、高校生の「読むこと」「書くこと」における英語コミュニケーション能力の到達状況を測定し、生徒の実態や課題を明確にし、生徒の実態に応じた学習指導方法改善のための資料としたいと考え、本研究主題を設定した。

3 研究の目標

- (1) 高校生の「読むこと」「書くこと」における英語コミュニケーション能力に関する調査票を作成し、実態調査を実施して、生徒の実態や課題を明らかにする。

- (2) 「読むこと」「書くこと」における英語コミュニケーション能力について調査結果を分析し、学習指導方法改善の方策を探る。

4 研究の内容と方法

(1) 研究の内容

- ア 調査票作成について、文献等による理論研究及び先行研究を行う。
- イ 「英語コミュニケーション能力に関する調査票」を作成し、調査を実施する。
- ウ 調査結果を分析し、考察する。
- エ 調査結果の分析から、学習指導方法改善のための視点を明らかにする。

(2) 研究の方法

- ア 新学習指導要領外国語科の目標を踏まえ、「英語コミュニケーション能力に関する調査票」を作成する。
- イ 地域や履修単位数を考慮し、県立普通高等学校、県立商業高等学校からそれぞれ数校を抽出して調査を実施し、集計・分析する。
- ウ 学習指導方法改善のための視点を探るために、中学校での調査結果と比較する。

5 研究の実際

(1) 調査票作成の基本的な考え方

平成15年度より新学習指導要領が実施されるために、今回の調査票は新学習指導要領外国語科の目標に基づいて作成した。高等学校第1学年で調査を実施するため、特に、「英語」の「読むこと」「書くこと」に関連した言語活動を念頭に置いて、問題を作成した。(調査票はp92～p93に添付)

また、Canaleの定義による4つの能力(文法能力、社会言語学的能力、談話能力、方略的能力)を測れるような問題形式を取り入れ、和文英訳や英文和訳というような形を避けるようにした。

Canaleの4つの能力についての定義は以下のとおりである。

- ・ 文法能力.....文法的に正確な語や文を理解し、生み出す能力
- ・ 社会言語学的能力.....言語が使用される社会的文脈を理解する能力を意味し、特定の発話が場面で適切かどうかを判断する能力
- ・ 談話能力.....会話に限らず、全体的に意味を為すような内容を形成する一連の文、または、談話を理解し、作り出す能力
- ・ 方略的能力.....相手に意思を伝えるのが困難なときに、自分が知っている文や語を用いて言い換えたり、繰り返したり、身振りなどを使って意思を伝えようとする言語的及び非言語的能力

以上のことを考慮し、調査票作成の基準を表1のように定めた。

(2) 出題範囲

調査実施時点までに「英語」で習得すべき学習内容の範囲内とした。

(3) 問題の程度

新学習指導要領に示されている「英語」の目標及び内容を基準とした。

(4) 調査の実施

- ア 実施期間 平成13年2月1日(木)～9日(金)
- イ 調査対象校
地域、履修単位を考慮して、英語を6単位履修している県立普通高校3校、英語を4単位履修している県立商業高校3校を抽出した。

ウ 調査対象者

普通高校では普通科1年生の2学級を，商業高校では商業科1年生の各2学級を抽出し，調査を実施した。(12学級，443名)

エ 調査時間 50分(「英語に関するアンケート調査」を含む。)

表1 調査票作成の基準

	「読むこと」	「書くこと」
「英語」の言語活動	英語を読んで，情報や書き手の意向などを理解したり，概要や要点をとらえたりする。	聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて，整理して書く。
作成基準	<p>1 500語程度の英文の理解度と読解速度を測定する問題 (観点) 新聞やホームページを読んだり，テレビなどの字幕やテロップを読んだりという，実際のコミュニケーションの手段として「読む」場合に必要な読解力・速度の測定 (内容) T F方式(×方式)により出題 読解速度の測定は，Spargo(1989)の<i>Timed Readings</i>の方法を採用 1分間の読解語数の計算式は，金田正也(他編)(1990)の<i>MULTI-LEVEL Reading Program</i>の中で用いられているものを採用</p> <p>2 150語程度の英文の概要を日本語でまとめる力を測定する問題 (観点) 読み取ったことを自分でまとめるという問題により，T F方式による測定のあいまいさを補完し，読解のレベルをより明確に測定 (内容) まとめる力の差違を見るため，長短2つの段落について出題</p>	<p>1 英文を読み，その内容と関連させて，自分の考えを英語で書く力を測定する問題 (観点) 一定の表現にこだわらず，自分の使える単語，構文の範囲内で自由に表現する力を測定 (内容) あるテーマに沿って自分の考えをまとめる問題を出題</p> <p>2 読みとった状況に応じて英語で応答する力を測定する問題 (観点) 日常会話レベルでの表現力を測定 (内容) 相手の質問に応答したり，会話を発展させる問題を出題</p> <p>3 与えられた状況に応じて，自分の考えを英語で伝える力を測定する問題 (観点) 身近な場面での表現力を測定 (内容) 与えられたキーワードを用い，理由を述べて相手を説得する問題を出題</p> <p>4 自分の考えを英語でまとめて書く力を測定する問題 (観点) 中学校と比較分析をするため，共通問題を作成し，自由な発想を表現する力を測定 (内容) ある事柄について，中学2年生が理解可能な資料を提示し，それを参考にして，自分の考えを理由とともに述べる問題を出題</p>
所要時間	<p>1 「読むこと」と「書くこと」にそれぞれ同じぐらいの時間がかかるであろうと予測</p> <p>2 問題ごとに解答の目安となる時間を設定(「読む」問題と「書く」問題を合わせて50分)</p>	
評価法	伝統的評価法	分析的評価法

(5) 調査票の作成

調査票作成の基準に基づき，問題に使用する長文等を検討し，最終的に表2のような問題構成とした。

表2 問題構成表

領域	新学習指導要領の指導事項	大問	小問	問題内容	配点	時間(分)
読むこと	文章の概要を的確につかみながら読むこと	1		物語文を読み，その内容に合う英文を選ぶ。	14	15
	文章を読み，その要点をまとめること	2	1	エッセイを読み，要点を段落ごとに日本語でまとめる。	9	10
書くこと	読んだ文章の内容に関して，自分の感想や考えを書くこと		2	エッセイを読み，その内容に関して，自分の考えなどを英語で書く。	9	
	状況を的確につかんで，自分の伝えたい内容を正確に書くこと	3	対話文を読み，空所にその状況に応じた文を英語で書く。	18	5	
	状況に応じて，自分の考えなどを相手に正しく伝えるように書くこと	4	与えられた語句を利用して，相手を納得させることができるように，自分の考えや気持ちを英語で書く。	18	10	
	自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書くこと(中学校との共通問題)	5	自分の好きな季節について，好きな理由や自分の考えが正しく伝わるように英語で書く。	11	10	

問題検討の経緯と出題のねらいは，以下のとおりである。

ア 大問①〔英文読解の速度と理解の度を測る問題〕

読解の速度を測るためには，ある程度の長さのある英文を読ませた方がよいとの考えから，500語程度の英文とした。実際の「読むこと」によるコミュニケーションの場合には，新聞やホームページ上の情報のように，論説的な文が多いと考えられるが，概要をつかみながら読むという活動に慣れていない生徒が多いと予測されるため，話の流れがつかみやすいように物語文を使用した。

問題文出典：星 新一 著 ロバート・マシュー訳 『気まぐれロボット』 講談社

イ 大問② 問1〔英文の概要をとらえる問題〕 問2〔自分の考えをまとめて書く問題〕

大問①でかなり長い文を読ませることになったので，生徒の負担を考えて，大問②の英文は130語程度のものとした。問2で，自分の考えを英文で書かせるために，短い論説文を選んだ。

問題文出典：ジム・カヌースン 著 *American Times* 南雲堂

ウ 大問③〔読み取った状況に応じた受け答えをする問題〕

生徒たちは，中学校の授業で様々なコミュニケーション活動を行い，基本的な日常会話に使われるような多くの表現に触れている。そのような表現をどれくらい活用できるのかを見ると同時に，大問②のように長い英文を書くのが苦手という生徒にも書くチャンスを与えたいとの観点から作成した。

(1)，(2)は，相手の質問に答えるパターン，(3)は，会話を発展させる受け答えとした。

エ 大問④〔与えられた状況に応じて自分の考えを相手に正しく伝える問題〕

生徒の身近な場面での表現力を見ようとして作成した。キーワードは，生徒が解答する際のヒントになるように，また，生徒の自由な発想をできるだけ妨げないように配慮した。

オ 大問⑤〔自分の考えをまとめて書く問題〕中・高共通問題

中学2年生が，調査実施時期までに習得している表現を使って書くことができる問題で，かつ高校1年生が一步進んだ表現をすることができるような問題となるように配慮した。具体的な状況の中で，自分の考えをまとめて，理由まで書くことを要求している。ヒントになる表現は，中高の条件を同じにするために同一のものを使用した。

(6) 採点基準の作成

ア 評価方法

評価は、それぞれの問題の特性により、伝統的評価法、分析的評価法を用いた。

(ア) 伝統的評価法

解答を1文ごとに採点する評価方法で、客観的解答が要求される「読むこと」の採点では、この方法を採用した。

(イ) 分析的評価法

観点別に評価点を設定して採点する評価方法で、「書くこと」の採点で採用した。評価の観点を「つづり・文法」「内容」「意欲(積極性)」の3つとし、それぞれ3点あるいは4点で採点した。

イ 調査票の採点基準

調査票の採点に当たり、採点者間のずれを最小に抑えるために、採点基準(表3)を設定した。

大問5は中学校との共通問題なので、採点基準は中高で統一した。

表3 採点基準表

大問	小問・項目		採点基準	評価方法
1			完全正答 各2点 採点とは別に読解速度を測る。	伝統的評価法
2	問1	第1段落	3点 「日本の大学生の年齢は、ほぼ18~24歳であること」というポイントがつかめていること。	伝統的評価法
		第2段落	6点 「アメリカの大学生には、あらゆる年代の人がいること」及びその理由が書かれていること。	
	問2	「つづり・文法」「内容」「意欲(積極性)」の3つの観点から採点する。(各3点) 使用している語、文法事項についても、採点とは別に分析する。		分析的評価法
3			「つづり・文法」「内容」の2つの観点から採点する。(各3点) 使用している語、文法事項についても、採点とは別に分析する。	分析的評価法
4			「つづり・文法」「内容」「意欲(積極性)」の3つの観点から採点する。(各3点) 使用している語、文法事項についても、採点とは別に分析する。	分析的評価法
5 (中・高共通問題)	つづり・文法		3点(内容に関する分析的評価で、得点した分についてのみ評価を行う。) ・完全な文(つづりミス・文法ミスなし)が1文書けていれば1点 ・完全な文(つづりミス・文法ミスなし)が2文書けていれば2点 ・完全な文(つづりミス・文法ミスなし)が3文以上書けていれば3点 I like ~ のパターンでの単なるSVOの羅列は1点。ただし、比較表現・前置詞句等が加わったり、because でつなげてあれば2点。	分析的評価法
	内 容		4点(意欲に関する分析的評価で、得点した分についてのみ評価を行う。) ・「好きな季節」が書いてあれば1点 ・「好きな理由」が書いてあれば1点 ・「自分の気持ちや考え」が書いてあれば1点 ・「自分の気持ちや考え」が創造的に書いてあれば更に1点 I like ~ のパターンでの単なるSVOの羅列は2点まで。 (例) I like summer. I like summer vacation.	
	意 欲		4点 ・文は書けなくても単語1語でも書いてあれば1点 ・不完全な文でもいいから1文書いてあれば2点 ・不完全な文でもいいから2文書いてあれば3点 ・不完全な文でもいいから3文以上書いてあれば4点 I like ~ のパターンでの単なるSVOの羅列は2点。ただし、比較表現・前置詞句等が加わって工夫してあれば、それぞれを1文と見なし、2~4点とする。	

(7) 「英語に関するアンケート調査」の結果と考察

生徒の英語学習に対する姿勢等が英語学習の成果に少なからず影響を与えるとの考えから、調査の際には、英語に関するアンケート調査を同時に実施した。(調査票はp93に添付)

中学校との共通問題の分析を考慮して、アンケートの内容や文言は中学校とほぼ同一のものとした。アンケート調査の結果は表4のとおりである。

表4 英語に関するアンケート調査 (単位：%)

ア 「とても好き・まあまあ好き」が約50%であり、中学校の約48%とほぼ同率である。普通科と商業科の生徒のみへのアンケートではあるが、英語に対する興味・関心は高校でも持続していると考えられる。

イ 「あまり得意ではない・全く得意ではない」が約77%、中学校は約71%である。学習内容の難度が高くなるにつれて、不得手意識は強くなっている。

ウ 学習を「全くしていない」が約45%である。「30分未満」を合わせると、7割弱の生徒が英語に触れる絶対的な時間が不足している。

エ 「好きな活動」では、中高共に、「先生(ALT)の英語での話を聞く」、「本文の内容理解」に割合が高く、「話す・書く」活動に対する割合が低い。この結果は、実際の指導形態との関連が強いと推測され、指導方法改善の示唆になると思われる。

「英語でのインタビューゲーム」には、高校では約16%の生徒が「好き」と答えているにすぎないが、中学校では約36%と最も高い。この種の活動は高校においても、コミュニケーション能力育成のための有益な活動になるであろうと考えられる。

オ 「困ること」では、「単語が分からない」が約88%と、中学校の約60%から大幅に増えている。自宅学習時間も少なく覚える努力が不足していることもあろうが、効果的な語彙指導が必要である。

「英語の文の組立が分からない」が約70%ある。中学校でも72%と高く、統語上の問題の大きさがコミュニケーション能力向上の阻害要因になっていると考えられる。

英文の「内容理解」に難しさを感じているものが5割にのぼる。比較的長い文を「読む」ことに対する抵抗の強さがうかがえる。

設問及び選択肢	中学校 674名	高等学校 443名
問1 「あなたは、英語が好きですか。」		
とても好き	9.5	7.3
まあまあ好き	38.3	43.1
あまり好きではない	33.7	36.1
全く好きではない	18.5	13.5
問2 「あなたは、英語が得意ですか。」		
とても得意	3.7	1.4
まあまあ得意	25.4	21.5
あまり得意ではない	37.8	41.7
全く得意ではない	33.1	35.4
問3 「あなたは、授業以外で1日平均どれくらい英語を勉強していますか。」		
全くしていない	45.2	/
30分未満	22.8	
30分～1時間未満	23.3	
1時間～2時間未満	8.2	
2時間以上	0.5	
問4 「英語の授業では、どのような活動が好きですか」(複数回答可)		
単語を先生やCDの後について読む	24.2	14.1
教科書を声を出して読む	19.4	14.1
先生(ALTも含む)の英語での話を聞く	31.9	32.5
先生と英語でコミュニケーションをする	15.9	11.1
身近な内容について友達と英語で話す	14.4	8.0
友達との英語でのインタビューゲーム	35.9	15.5
自分の考えている内容を英語で書く	13.5	10.7
教科書の本文の内容理解	28.9	27.5
教科書以外の英文の内容を読み取る	14.5	17.7
その他(記述)	10.4	8.4
問5 「あなたが英語で書かれている手紙や文章を読んだり、自分の考えを英語で表現したりするときに、困るのはどのようなことですか。」(複数回答可)		
単語が分からない	60.4	87.5
英語の文の組立が分からない	72.0	69.5
辞書(和英・英和)の引き方が分からない	5.6	1.1
書かれている内容を読み取るのに時間がかかる	46.4	51.4
書かれている内容(考え)が理解できない	36.6	44.8
伝えたいことを表現するのに時間がかかる	46.9	48.0
伝えたいことが思い浮かばない	17.8	19.8
その他(記述)	1.2	1.2
問6 「この調査問題を解いて、難しいと思った問題、おもしろいと思った問題、意外に思ったことなど、あなたが感じたことを自由に書いてください。」 計237例の回答あり。		

カ 「単語が分からない」に類した記述が40例、「長文読解の難しさ」に関する記述が49例、「自分の考えを書く・状況に応じた英文を書くことの難しさ」に関する記述が67例あった。

(8) 「英語コミュニケーション能力に関する調査」の結果と考察

ア 調査の結果

「読むこと」「書くこと」におけるコミュニケーション能力を調査するという研究目標から、問題のほとんどが記述式の解答を要求するものとなった。生徒の自由な発想による解答を求めているので、それをどのように評価していくかが大きな課題であったが、できるだけ詳細な採点基準を作成して、同一の問題を複数の研究委員で採点することで評価の客観性を確保した。

また、生徒が実際に使うことができる語彙、構文等を知るために、解答に使用されている単語、構文や誤答についても分析をし、一定の傾向を見いだすことができた。

調査時間は、アンケートを含めて50分に収まった。

全体の調査結果は、表5のとおりである。全体を得点の高い方からA群、B群、C群の3群に分けて統計を取ることで、より詳細な分析を行うことにした。

表5 調査の結果

443名

	調査全体	読む領域	書く領域	大問①	大問②	大問③	大問④	大問⑤
配点	79	23	56	14	18	18	18	11
標準偏差	18.60	5.62	18.78	3.80	5.20	5.76	5.77	2.70
相関係数	1	0.82	0.98	0.68	0.85	0.89	0.85	0.60
平均得点率	50.9	45.6	53.0	40.7	45.6	57.2	51.7	60.9
A群	78.0	71.3	80.7	65.0	76.1	88.3	80.6	76.4
B群	50.5	39.6	55.0	31.4	41.1	60.6	57.2	62.7
C群	23.9	26.1	23.0	25.0	19.4	21.7	16.7	45.5

(表5, 6共に)

平均得点率 = 全生徒分(443名)

A群 = 150名(得点率65%以上), B群 = 150名(得点率38%以上65%未満), C群 = 143名(得点率38%未満)

全体と「読むこと」「書くこと」の領域及び各大問の間に高い相関が見られた。また、信頼性係数は0.83であった。一般に、この数値が0.80以上であれば問題に信頼性があると判断してよいとされている。以上のことから、この調査票は、英語の「読むこと」「書くこと」におけるコミュニケーション能力を測定するのに適した問題であると言える。

次に、「読むこと」「書くこと」の領域の小問・項目別の平均得点率を、A群～C群ごとに算出し、表6を得た。

表6 領域別の平均得点率(小問別・項目別)

	読むこと			書くこと								
	①	②問1 1段落	②問1 2段落	②問2 コブリ・文法	②問2 内容	②問2 意欲	③(1) コブリ・文法	③(1) 内容	③(2) コブリ・文法	③(2) 内容	③(3) コブリ・文法	③(3) 内容
平均得点率	40.7	63.3	48.3	36.7	36.7	40.0	66.7	63.3	46.7	43.3	60.0	63.3
A群	65.0	83.3	80.0	66.7	70.0	76.7	86.7	93.3	83.3	83.3	86.7	93.3
B群	31.4	63.3	46.7	30.0	30.0	30.0	73.3	70.0	43.3	36.7	66.7	73.3
C群	25.0	40.0	21.7	10.0	10.0	13.3	36.7	30.0	13.3	10.0	20.0	20.0

	書くこと								
	④(1) コブリ・文法	④(1) 内容	④(1) 意欲	④(2) コブリ・文法	④(2) 内容	④(2) 意欲	⑤ コブリ・文法	⑤ 内容	⑤ 意欲
平均得点率	53.3	46.7	46.7	53.3	53.3	53.3	46.7	57.5	75.0
A群	80.0	76.7	76.7	80.0	86.7	83.3	66.7	75.0	85.0
B群	56.7	53.3	53.3	56.7	60.0	63.3	46.7	57.5	80.0
C群	20.0	16.7	16.7	16.7	13.3	16.7	30.0	42.5	60.0

イ 調査全体の分析と考察

「読むこと」では、大問1の得点率が意外に低く、本文の見直しを禁止した影響の大きさがうかがえた。また、概要を日本語でまとめる問題（大問2問1）では、英文の長さが得点率を大きく左右した。英文の語数が100語を超えると、限られた時間で全訳して日本語にまとめる方法では対処できないことが多い。解答には、「語彙レベルでの全訳の途中段階」と思われるものも多く、語彙面での強化とともに、一方で、語彙にとらわれ過ぎない読み方を指導する必要性が感じられた。

「書くこと」の得点率が「読むこと」を7ポイント程度上回っている。その理由の一つに、「書くこと」において、「意欲（積極性）」を評価の対象としたことが考えられるが、発信しようとする態度を計る有効な手段としてとらえたい。一方、あるテーマで自分の考えを書く場合（大問2問2）は得点率が著しく低くなった。「書く」ためには、論理立てて考えをまとめる訓練が重要であるが、英語の学習指導にこそ積極的に取り入れるべき方法であると考えられる。

ウ 大問別の分析と考察

(ア) 大問1 [長い英文を読み、内容にあったもの（英文）を選ぶ] 解答に際しては本文の見直しを禁止

a 小問別特徴

小問別に見た選択率と特徴は表7のとおりである。

表7 大問1 小問別選択率及び特徴 (単位：%)

小問	選 択 肢	選 択 率	特 徴
1	ア	10.5	「イ」の選択率が48.2%と高い。laboratoryという語の印象の強さ、第一パラグラフ全体の理解不足による誤りであろう。 「エ」の選択率は1%未満である。他の選択肢との基本的な違いは読みとれている。関係代名詞の省略による意味の取り違えは少ない。
	イ	48.2	
	ウ(正解)	40.6	
	エ	0.7	
2	ア(正解)	48.2	正解の選択率は他の選択肢に比し最高であった。to不定詞の目的、what forの意味はほぼ理解できている。 「イ」の選択率が比較的高いが、kind ofに注意が向き、本文中の否定表現への注意が欠落している。見直しができないことが大きく影響したと思われる。
	イ	25.5	
	ウ	15.3	
	エ	11.0	
3	ア	18.4	全体の正答率は7問中6位の3割程度と低い。比較的長い文による理由を問う内容であり、かつ、avoidや、what it does is only for me to knowの意味が理解できなかったためであろう。 「ウ」の選択率が正答率を超えている。「he」を「N博士の友人」ととらえたための誤答であり、代名詞の把握の難しさが顕著に表われる結果となった。
	イ	11.2	
	ウ	38.9	
	エ(正解)	31.5	
4	ア	30.7	「ア」の選択率が3割を超えている。Yes, Noに続く文脈の理解不足によるものである。deaf, dumbの意味は一連の文脈からも推測可能であり、talkとspeakが内容的に同じであることに気付けば正解が得られたであろう。見直しの禁止による影響は大きい。
	イ(正解)	43.3	
	ウ	14.0	
	エ	12.0	
5	ア	20.0	全体の正答率は7問中最低であった。正解の文中、did nothing but stayの意味が理解できなかったことが最大の理由だと考えられる。 「エ」の選択率が4割近くあり、ここでもdid notという否定表現への注意の欠落が感じられる。
	イ	14.1	
	ウ(正解)	27.4	
	エ	38.5	
6	ア	16.5	全体の正答率は7問中最高であった。選択肢の英文が短く比較的平易であること、本文中にほぼ同表現があることが最大の理由であろう。 「ウ」drove the dog awayの選択率が比較的高かったが、本文中には無い難しい表現である。意味が取りにくいものをあえて選んだ感がする。
	イ	9.9	
	ウ	18.7	
	エ(正解)	54.9	
7	ア	21.2	全体の正答率は40%と意外に低い。「単に日記を書かせるだけのため」という「落ち」では納得しないのか、全体の流れとの整合性がない「ウ 研究を手伝わせるため」の選択率が3割近くもあった。「先入観にとらわれないこと」は「正確に読む」うえで重要な要素となる。 「ア」put ~ to bed at night「博士を寝かしつけるため」を2割以上が選択している。本文中のturn in for the nightという難しい表現に表面的な類似性が認められるための誤答だと思われる。
	イ(正解)	40.0	
	ウ	28.7	
	エ	10.1	

b 各群別に見た平均得点率及び平均読解速度

各群別に見た平均得点率と平均読解速度は表8のとおりである。

表8 各群別平均得点率・読解速度

	A 群	B 群	C 群	全 体
平均得点率 (%)	65.0	31.4	25.0	40.7
平均読解速度	38.2	17.2	14.9	23.6

平均所要時間は9.2分であり、各群ごとの有意差はほとんど見られず、今回の調査では、平均得点率と平均読解速度はほぼ比例した。また、平均得点率、平均読解速度ともに、A群とB・C群間の差が大きく、力の差が顕著に表われた。

読解速度 [本文の語数(491)/所要時間(分) × 正解数/設問数(7)] は、所要時間が少なく、正解数が多いほど大きくなる。この値が大きいということは、より速く正確な「読み」ができることの目安となる。しかし、本問題のような多肢選択の問題では、ほとんど読まずに解答することも可能であるなど、正解の選択に偶然性が関与する度合いが強く、正確な「読み」の力を測定するという点では課題を残した。

また、アンケート調査の自由記述から、問題文の見直しをさせなかったことは、被験者によってはかなりの負担となっていることがうかがえる。見直しを制限せず、解答終了時点での時間を基準にしたほうが、より、「読む意欲」を持続させ、問題の信頼性を高めることにつながったのではないかと考えられる。

(1) 大問2 問1 [英文の概要をとらえる] 問2 [自分の考えをまとめて書く]

小問別の平均得点率・無答率は表9のとおりである。

問1「読むこと」では、英文の長短が結果に大きく影響している。問2「書くこと」では、「自分の考えをまとめること」自体に強い抵抗が感じられた。

問1 (第1段落の内容を日本語でまとめる) は、2行という短い文をまとめる作業であるため、成績にそれほどの差は見られない。C群の生徒にも意味を取ろうとする意欲が見られる。(A群平均得点率約83%、C群平均得点率約40%)

表9 大問2 (単位: %)

		平均得点率	無答率
問1	第1段落	63.3	9.0
	第2段落	48.3	16.3
問2	つづり・文法	36.7	44.5
	内 容	36.7	43.6
	意 欲	40.0	43.1

誤答として、eighteen を「80歳」としたり、university の意味を知らないものが多く、また、否定の内容をもつseldomやexceptの定着の低さが目立った。

問1 (第2段落の内容を日本語でまとめる) は、6行・100語程度の英文の概要をまとめなければならない作業である。英文を読みとれてはいるが日本語でまとめるのが難しいのか、英文自体を読みとれていないのか、判断が難しい。

誤答として、thirties(forties, fifties, sixties)を「年齢」、しかも「13歳」ととらえたものが多かった。数を表す語彙は、取り違えると大きな誤解を生む恐れがあるにもかかわらず、定着率が低い。また、全体に、doesn't matterや never too lateの否定表現、made up one's mindやfeel like ~ ingといった慣用表現に対する未習熟も目立った。

使用されている単語自体はそれほど難しいものではなかったが、全体に、語彙レベルの訳にとどまり、日本語にまとめる段階に至っていない解答が多かった。

A群・C群間の顕著な得点率の差(A群平均約80%、C群平均約22%)を見ると、C群の生徒にとっ

てかなり困難な作業であったことが分かる。C群の生徒の英文の長さに対する強い抵抗と、基本的な読解力の不足を示す結果となった。

問2（問題文を読んで自分の考えを英語で書く）は、完全な自由英作文形式のため、C群にとってはかなりの難問であり、平均得点率を考えると問題自体の妥当性も低いものとなった（C群の分析的評価は全項目が平均13%以下）。また、英語の表現能力を考慮すると、直接英語で書かせる前に、一度日本語で考えをまとめさせることも必要であったかもしれない。日本語でまとめた時点で部分点、それを英語に直したものに加点する採点方法も考えられるであろう。

全体として、つづりの不正確さに加え、(助)動詞の重複、be動詞+(助)動詞、動詞の変化形やto不定詞の語形に関するもの、動詞を主語に代用したものの、日本語の語順に影響されて文を作ったであろうと思われる例など、統語上の規則に関する誤りが数多く見られた。

平均得点率はA群が約71%であるのに対し、B群は約30%、C群はわずか11%である。無答率も全体で約43%と高く、B群・C群の生徒にとってかなり厳しい結果となった。

(り) 大問3 [会話文の空所に適切な英文を書く]

全体の平均得点率はA群約88%、B群約61%、C群約22%であり、A群・B群とC群間の差が大きい。無答のほとんどはC群に集中しており、低得点の最大要因となっている。

小問別の平均得点率・無答率は表10のとおりである。

問(1)（嬉しい理由を述べる）は、A B A のBを答えるのだが、A , 特に、Congratulations!との関連を十分に理解したうえでなければ適切な解答は得られない。C群にはAのみに影響された解答が多かったが、平均得点率は約33%と、問(2)の約12%、問(3)の約20%を大きく上回った。感情表現には比較的慣れていることの証左と言える。

問(2)（店員に対して欲しいものを述べる）は、A B A のBを答える問題だが、大問3では平均得点率は最も低い。店での会話という状況把握ができないと的はずれな解答になってしまう。また、欲しいものを具体的に表現できずに得点できなかった生徒も多かった。特にB群の低得点率（平均約40%）が顕著であり、問(1)の約72%、問(3)の約70%を大きく下回った。

問(3)（外国へ行ったBに対して追加して述べる）は、A B A のA の後半を答える問題である。最後に一文付け加えるだけであり制限が他の2問に比べ少ない問題であったが、C群の生徒にとっては手ごわい問題となった。発展的な内容を付加して表現する訓練の必要性が感じられた。

(I) 大問4 [指示された目標を達成するため、与えられたキーワードを用い、相手を説得する英文を書く]

小問間、分析的評価の各項目間で得点率に際立った差は見られなかった。

全体の平均得点率はA群約81%、B群約57%、C群約17%で、B群でも5割を超えるが、C群の低さが際立つ。無答率はB群では7%弱であるが、C群では約48%と極端に高くなっている。

状況を指示し、盛り込むべきキーワードを提示しているので、語彙力不足はさほど障害とならず、状況把握力、想像・発想力、英文の構成力がポイントとなってくる。これらの力はA群とB群では大きな差がない。C群では、英文の構成力の乏しさが、意欲・想像力を低下させていることがうかがわれる。

英文の構成力を高めるためには、基本的な文法・構文など最低限の規則を習得後、それらを含む簡単な英文の暗記から入り、徐々にコミュニケーション的な言語活動に進むべきであろう。

小問別の平均得点率・無答率は表11のとおりである。

表10 大問3 (単位：%)

		平均得点率	無答率
問	つづり・文法	67.7	17.4
	(1) 内 容	63.3	21.2
問	つづり・文法	46.7	35.2
	(2) 内 容	43.3	40.0
問	つづり・文法	60.0	25.7
	(3) 内 容	63.3	28.2

問(1) (親にパソコンを買ってもらう)では、平均得点率はA群約78%、B群約54%、C群約18%で、B群・C群間の開きが大きい。無答数はC群で60%にのぼる。

誤答例として、want to personal computer, want buy personal computerのようにwant to+名詞, want+動詞などが目立った。ほかに、the Internet is help, I am buyのようにbe+動詞の原形, personal computerに冠詞をつけていないもの、can computer, can usedのように助動詞のあとに原形が来ないものなどがあつた。また、usefulが形容詞と分からず、使用例がほとんどなかった。

問(2) (試合を見に行けないことを、選手である友人に納得してもらう)では、平均得点率はA群約83%、B群約60%、C群約16%で、B群・C群間の開きは問(1)に比し更に広がる。A群・B群は、問(1)より得点率は高いが、C群は下がり、無答数も約66%に増えている。

誤答例としては、can't go your gameのようにgo to 名詞のtoの無いもの、have to homeworkのようにhave to doのdoの無いもの、want to+名詞、be going to+名詞や、cannot went, will wentなど助動詞+過去形/～ingが多かった。ほかに、gameに冠詞をつけていないもの、つづりの誤り、S+Vの構造を持たない英文も多かった。

(オ) 大問5 [自分の好きな季節について、好きな理由や自分の考えなどが正しく伝わるように英文を書く]
季節ごとに特徴的な行事についての英語表記あり 中学校との共通問題

a 項目別特徴

平均得点率はA群約76%、B群約63%、C群約45%であり、大問4ほどの各群間の開きはない。

中学校との共通問題で、身近な話題でキーワードも提示され、取り組みやすい問題であるためか、全問題中最高の得点率であった。無答率も大問2～5の各項目を通じて最も低い。

B群及びC群にも、書こうという高い意欲がうかがわれ、内容も分かりやすいものが多かった。意欲を喚起し、内容的にまとまりのある英文を書かせる上で、本問題のような身近な話題で自分の考えを表現できる課題英作文は有効なタスクである。反面、「表現したいことを書いた」というより「表現しやすいことを書いた」という印象が強かった。この質的なギャップを埋めていくには、このようなタスクを積極的に授業に取り入れていく過程で、物事を論理的に考え、その考えを実際に表現する訓練を並行して行う必要がある。

(a) (つづり・文法)

語法上の誤りとしては、I like ski(to doのtoなし)、I want to snow(want to 名詞)、It's long vacation / It's a very funny(冠詞の誤用)、eat ice(外来語との混同)、I like cool better than warm(品詞の理解)、I am go toやfood is tastes good (be動詞の誤用)、It has not homework(一般動詞haveの誤用)、They made me very exciting(分詞の理解)、because spring vacation (because +名詞)、I like the best is a summer vacation / ski can only for winter / Christmas is getting the present / Don't have to go to school is very happy for me (日本語的発想)などが目立った。特にC群では、単数複数の理解と表記、be動詞と一般動詞の重複、主語の欠落、動詞の欠落、つづりの誤りが多かった。

平均得点率はA群約67%、B群約47%、C群約30%で、どの群も分析的評価の中では最低の得点率であった。

(b) (内 容)

全体に、I like ~のパターンが多い。A群・B群でも、I like ~ because ...and ... のよう

表11 大問4 (単位：%)

		平均得点率	無答率
問 (1)	つづり・文法	53.3	25.7
	内 容	46.7	26.9
	意 欲	46.7	25.4
問 (2)	つづり・文法	53.3	26.2
	内 容	53.3	28.0
	意 欲	53.3	25.8

な解答が多く見られ、自分の考えや個性的な具体例を書いたものは少ない。平均得点率はA群約75%、B群約58%、C群約43%で、各群間の開きは比較的小さい。

(c) (意 欲)

平均得点率はA群約85%、B群約80%、C群約60%で、どの群も全問題の中で最も高い。各群間の開きは小さく、書こうとする意欲の高さがうかがわれた。

b 中学校との比較

項目別の平均得点率は表12のとおりであり、いずれの項目においても、高等学校が9%程度高かった。「つづり・文法」は50%を超えておらず、完全な文章を作ることが苦手としている生徒が多いことが分かる。

表12 大問5項目別平均得点率 (単位: %)

	中 学 校	高 等 学 校	中学校との差
つづり・文法	38.4	46.7	8.3
内 容	47.8	57.5	9.7
意 欲	66.2	75.0	8.8

「つづり・文法」を基準にして、他の観点とクロス集計した結果は図1、図2のとおりである。

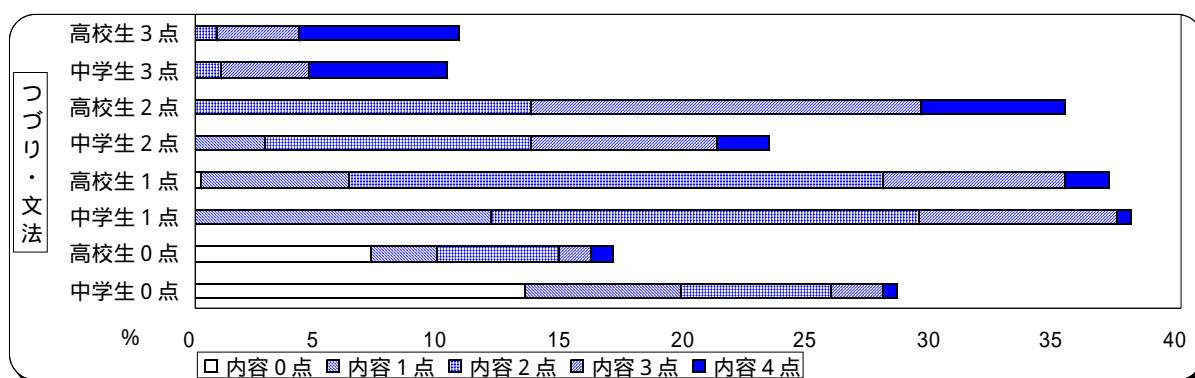


図1 大問5 「つづり・文法」と「内容」のクロス集計

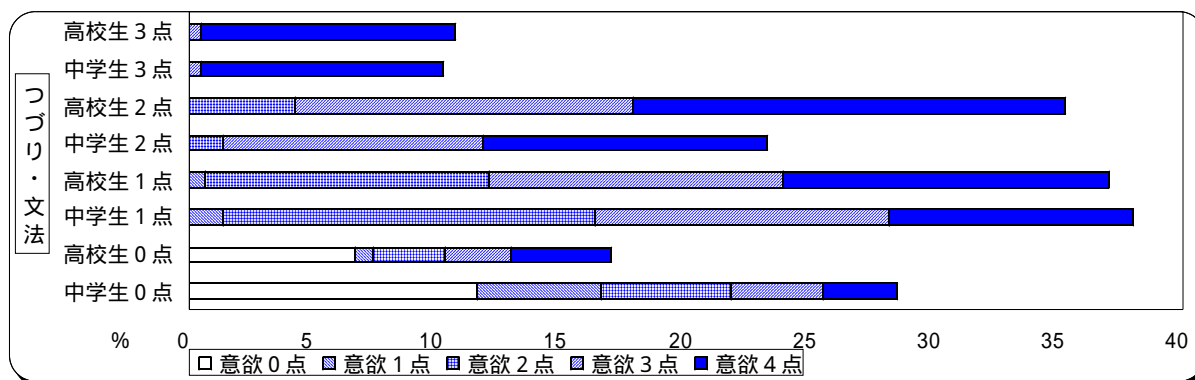


図2 大問5 「つづり・文法」と「意欲」のクロス集計

「内容」については、「つづり・文法」が2点以上で「内容」が4点の生徒が中学校で7.7%、高等学校で12.3%あり、書く題材を高校生の方が多くもっていることが分かる。「意欲」については、中学校、高等学校とも高い得点率を示しており、知っている単語や語句を並べて相手に自分の気持ちや考えを伝えようとしていることが分かる。「つづり・文法」が0点でも「意欲」が4点の生徒が中学校で3%、高等学校で4%いることから、自分の考えを相手に何とかして伝えようという積極的な姿勢がうかがわれる。反面、「つづり・文法」では、中学校で約66%、高等学校で約54%の生徒が1点以下であり、語彙や文法力の不安定さが改めて明らかとなった。

中学校では、コミュニケーション能力の育成に重点を置いた指導が行われており、高等学校でもその必要性はますます高くなっている。「書くこと」についても、中学校での指導が高等学校での指導に有機的に結び付くような配慮が双方に求められる。今回の調査で、中学、高校生共に、「書くこと」について

高い意欲を持っていることが分かった。指導する側としては、この意欲を最大限活用した指導方法を、評価方法と合わせて考えていくことが大切である。具体的には、この中高共通問題のような「ある条件のもとで自分の考えをまとめ、相手に伝える」形式の課題英作文を、中学校の早い段階から取り入れ、徐々に自由英作文に移行することが重要である。こうした指導方法は、生徒に、自己表現できるという喜びを体得させ、学習内容を実感させるとともに、運用できる語彙や文法を自然に身に付けさせるうえで大きな効果が期待できる。

6 研究のまとめ

(1) 「読むこと」について

「読むこと」では、全体として、語彙が障害となり、英文を読むことに対する耐性が低く、長文の内容を一定時間で把握することの難しさが結果に表われた。また、概要を日本語でまとめる問題では、100語を超えると得点率が著しく低下した。

以下は、各群ごとの特徴及び指導方法改善の視点である。

- | |
|---|
| <p>A群：概要を把握する力、要点をまとめる力共に到達度は高いが、否定表現への習熟は十分ではなく、また、語彙力に対する不安も大きい。到達度に応じた教材の提示が必要である。</p> <p>B群：長い英文を直接理解する力が不足しており、また、要点をまとめる問題でも逐語訳の解答が多い。読解速度もA群に比べ顕著に低下している。平易な英文を多読する訓練が必要である。</p> <p>C群：概要を把握する力、要点をまとめる力共に到達度は低い。英語に対する抵抗を少なくするために、基本的な語彙力・文法力を養成し、短い英文を直接理解する訓練を通して、成就感を得させることが必要である。</p> |
|---|

生徒の中には、全文を日本語に直さなければ意味が分からないという、単語にこだわった効率の悪い読み方をしている者もいる。実生活で英文を読む場合、辞書の使用は最小限にして、できるだけ早く内容を読み取ることが必要である。そのためには、多少の分からない単語は推測（選択・比較・消去）することで読み進んでいく技術が要求される。実践的なコミュニケーション能力として「読むこと」を考えると、知らない単語で立ち往生せずに、文脈に沿って概要をつかもうとする読み方を習得させるような指導方法を考えていかなければならない。

(2) 「書くこと」について

「書くこと」では、全体として、「指示に従って情報を伝える」場面での積極性が顕著に見られた。また、「意欲」や「積極性」を評価の対象とすることで、生徒個々の実態をより正確に把握することができた。特に、この評価法は、中位以下の生徒に効果的であることが分かった。一方、「テーマに沿って自分の考えを書く」場面では、文構成力・発想力不足から十分な解答は少なかった。

以下は、各群ごとの特徴及び指導方法改善の視点である。

- | |
|--|
| <p>A群：平易な対話文に対する適応力や一定の条件下で意思を伝える力はほぼ身に付いているが、自分の考えをまとめ、相手に伝える力は十分ではない。論理的な構造をもつ英文作成の訓練が必要である。</p> <p>B群：平易な対話文に対する適応力はある程度認められるが、自分の考えを伝える問題では、語彙力・文構成力が十分ではなく、発展的な表現には至っていない。文の組立に関する指導を徹底し、複文を作成する訓練が必要である。</p> <p>C群：語彙・語法に関する知識が不足し、まとまりのある英文が書けない。一方、一定の条件下で意思を伝える場面での意欲はA・B群と大差がない。「意欲」を最大限評価し、主語と述語を中心とした平易な英文作成の訓練が必要である。</p> |
|--|

「書くこと」の問題の誤答例として最も典型的に現われているのが、be動詞・動詞・助動詞の重複である。その他、動詞の変化形やto不定詞の語形に関する誤り、日本語の語順に影響されて文を作ったであろうと思われる例など、統語上の規則が身に付いていないことが「書くこと」において大きな障害となっている。反面、過度に規則を意識させると、誤りを恐れて、「書くこと」に対する意欲を損なうこ

ともなりかねず、コミュニケーションの第一義的な意味が失われてしまうであろう。「書くこと」におけるコミュニケーション能力を高めるうえで克服すべき課題は、まさにこの「規則の習熟」と「積極的な姿勢」をいかに両立させるかにあると言える。

(3) 指導上留意すべきこと

ア 運用できる語彙力の増強

「読むこと」「書くこと」におけるコミュニケーション能力を育てるためには、学んだ語をその場で使って表現する練習を通して、生徒が様々な場面で使いこなせる語彙を増やしていく必要がある。その際、単に辞書的な意味の提示に終わらず、品詞や接辞構造のような単語内の情報とともに、連結やスキーマ(背景知識)のような語と語の間の意味関係にも留意することで、生徒の記憶を助け、知識を整理することができるように配慮することが重要である。

イ 文の組立に関する規則への習熟

「書くこと」におけるコミュニケーション能力を高めるためには、文の組立に関する基本的な規則を身に付ける必要がある。そのためには、「あるテーマに沿って自分の考えを書く」というタスクを、まず、「主語と述語動詞」を中心とした基本的な文構造の中で徹底的に反復練習させ、自己表現できる喜びを実感させながら、徐々に、複雑な文構造の理解へとつなげていくことが重要である。特に、この訓練は英語学習の初期段階から導入することが効果的であり、中学校との連携が重要な要件となってくる。その際、物事を論理的に考え、筋道を立てて表現する習慣を付けさせることが大切である。書く経験の初期においては、「君の言いたいことと、だれにそれを言いたいかを決めなさい。それから書きなさい。」(Harold Nicholson)⁽¹⁾ということばが有益な助言となる。

ウ 評価に関する工夫

アンケート調査によると、英語の「好き・嫌い」はほぼ同数であり、「好き」と答えた生徒の約45%がA群に、「嫌い」と答えた生徒の約49%がC群に属している。このことは、「好きになること」が英語上達の大きな要素であることを改めて示しており、「嫌いにさせている」要因を洗い出し、一つ一つ取り除いていくことが重要になってくる。従来、つづりや文法、内容に中心を置いた評価方法が大勢を占めており、そのことが、生徒の積極的に表現しようとする態度を萎縮させ、「英語嫌い」を助長してきた感がある。「英語を好きにならせる」ためには、評価する側が、特に、つづりや文法の誤りについて許容度を大きくもつとともに、意欲や積極性を計る観点を毎時の授業や各種考査等の中に位置付け、年間を通した評価法として徹底できるかが条件の一つとなる。

《研究委員》

松本 裕史	佐賀県教育センター指導主事	平成13年度
牧瀬 瑞恵	佐賀県教育センター指導主事	平成12年度
高尾 伸之	佐賀県立鳥栖高等学校教諭	平成12～13年度
梅崎 浩正	佐賀県立牛津高等学校教諭	平成12～13年度(平成12年度佐賀県立佐賀東高等学校教諭)
長濱 良平	佐賀県立唐津商業高等学校教諭	平成12～13年度

《引用文献》

- (1) N.ブルックス(納谷友一・青木昭六訳注) 『言語と言語学習 理論と実際』 1972年 大修館書店 p168

《参考文献》

- ・ 文部省 『高等学校学習指導要領』 1999年 大蔵省印刷局
- ・ 文部省 『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』 1999年 開隆堂出版
- ・ 文部省 『中学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』 1999年 東京書籍
- ・ 金田 正也他 編 *MULTI-LEVEL Reading Program Series 1* 1990年 語研
- ・ 望月 昭彦 共著 『英語コミュニケーション能力の評価測定 ---個別・総合テスト, 分析的・総合評価について---』(平成8年度～平成10年度科学研究費補助金研究成果報告書) 1999年 筑波大学
- ・ 望月 昭彦 編著 『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』 2001年 大修館書店
- ・ Canale, M. *From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy, Language and Communication* edited by J. Richards and R. Schmidt 1983年 London:Longman
- ・ Spargo, E. *TIMED READINGS Third Edition* 1989年 Jamestown Publishers

英語コミュニケーション能力に関する調査票

番号	
----	--

解答上の注意

- 1 「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
- 2 問題①は、下の問題文の指示に従って解答しなさい。問題①が終わってから、後の問題に進みなさい。
- 3 調査時間は50分です。
- 4 問題①を除いて、解答はそれぞれの解答欄に記入しなさい。
- 5 問題①を除いて、正解は1つではありません。問題文をよく読み、状況に応じて、解答しなさい。

(ここから、問題になります。)

- ① 次のページの英文は、あるロボットについての物語です。どんなロボットなのか。それを巡って、製作者のN博士とその友人が、どのような行動をするのか。物語の流れをつかみながら、できるだけ早く読みなさい。筋がつかめるまで、何度読み返してもかまいませんが、第2ページ(英文の裏に印刷してあります)の問題を解き始めたら、第1ページの英文を見直すことはできません。読み終わって第2ページを開く前に、それまでの所要時間を第1ページの下にある欄に記入しなさい。

[問題1] の英文)

Dr. N. made a robot, which he kept by his side all the time, at home and in his laboratory. Naturally, it also came with him to and from work, and even when he went on trips on his day off. Like a shadow it followed him everywhere. But no one but the doctor knew what it did.

One day a friend came to see Dr. N.

"You've always got that robot with you, haven't you?" he said.

"Yes. It's very important."

"But each time I visit you I've never seen it do anything. It doesn't bring you cups of tea and it doesn't sweep your room or clean the garden either."

"It wasn't made for that kind of work."

"Then what's it for?"

"It doesn't do anything important. And, in any case, what it does is only for me to know."

As the doctor avoided his friend's questions, the friend tried asking the robot itself.

"What do you do?"

He thought the robot would not lie to him, but no matter how many times he asked the question, he never got a reply. So he turned again to Dr. N.

"Is your robot deaf?"

"No. It's able to hear."

"Well then, is it dumb?"

"Yes. It has no need to talk."

This brief answer, however, did not explain anything.

The friend became more and more curious. The next day he waited until Dr. N. left the house and then followed him secretly.

But all the robot did was follow the doctor, nothing more. It did not carry his briefcase, and when the doctor dropped his handkerchief, it did not pick it up for him or even seem to care.

Finally the friend hit on a plan. He decided to frighten them with a dog. This time the robot would have to do something.

The dog barked fiercely at Dr. N. Surprised, the doctor turned and ran away, but the robot made no attempt to help him. In fact, far from helping, it simply ran away with him. The friend watched all this from a hidden spot.

"What a terrible thing! It's really useless. What a strange thing to make," he whispered to himself.

He stole into the laboratory and watched, but here too everything was just the same. The robot simply stood by the doctor's side. He soon tired of watching.

When evening fell the doctor returned home. Then, as he was about to turn in for the night, he gave the robot a brief order.

"Right, do it now!"

The robot finally sprang into action. It sat at the desk, opened a notebook, and started writing up the day's events. It wrote about going out, losing a handkerchief, meeting by a dog, running away from the animal...

As the doctor watched from his bed, he laughed to himself.

"I find it too boring to record my own life so I built this robot. But I'm just too shy to tell anyone." (491 語)

2 ページを開く直前に記入してください。

所要時間	分	秒
------	---	---

2 ページを開いた後は、この英文を見直してはいけません。

2 次の英文を読んで、下の問いに答えなさい。

In Japan, universities are for young people. Most students on campus are between the ages of eighteen and twenty-four. You seldom see anyone older (except the teachers, of course).

In America, age doesn't matter. Anyone can go to university. On any campus you will find students who are in their thirties, forties, even fifties and sixties. When they were young, these people couldn't go to college. They probably didn't have enough money. Or maybe they were already married and didn't have much time. Or maybe they just didn't feel like studying in those days. But now they have more time and money. Now they have definite goals. So they have made up their minds to go back to school. It's never too late, they say.

問 1 この英文の要旨を段落ごとにまとめて、日本語で書きなさい。

問 2 大学での勉強に限らず、あなたは、「学ぶ」ということについて、どんな考えや目標をもっていますか。この英文にあるような日米の違いなども参考にして、自分の考えを英語で、できるだけ詳しく書きなさい。

問 1	(第 1 段落) ----- -----
	(第 2 段落) ----- ----- ----- -----
問 2	----- ----- ----- ----- -----

(解答欄が足りないときは、この用紙の裏に続けて書いてください。)

3 次の(1)~(3)について、A、B 2人の会話文の空所に、あなたがAやBになったつもりで状況に適した言葉を自由に考えて、4語以上の英語で書きなさい。2文以上になってもかまいません。

(1) A: You look so happy, don't you?
 B: ()
 A: I'm glad to hear that. Congratulations!

(2) A: May I help you, sir?
 B: ()
 A: O.K. How about this one?

(3) A: Where did you go during the holidays?
 B: I went to Australia.
 A: Sounds great! ()

4 次の(1)、(2)に指示されている目標を達成するために、きちんと理由を述べて、相手を説得する言葉を考えなさい。ただし、それぞれ示してあるキーワードを必ず2つ以上使いなさい。語の形は変えてもかまいません。また、2文以上になってもかまいません。

(1) 目標：親にパソコンを買ってもらおう。
 キーワード：personal computer, the Internet, useful, help

(2) 目標：試合を見に行けないことを、選手として出場する友人に納得してもらおう。
 キーワード：game, have to, hope, next

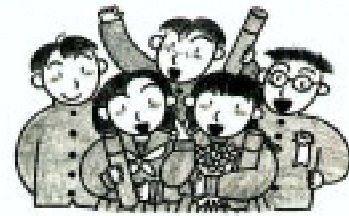
3	(1)	
	(2)	
	(3)	
4	(1)	----- ----- -----
	(2)	----- ----- -----

5 授業で、ALT からあなたの好きな季節を尋ねられたとします。あなたの一番好きな季節 (season) を選び、その季節と好きな理由を 3 文以上の英文で書きなさい。下の資料を参考にしてもかまいません。

資料

春 (spring)

卒業式..... a graduation ceremony
入学式..... an entrance ceremony
始業式..... an opening ceremony
春休み..... spring vacation
ゴールデンウィーク..... golden week
中間テスト..... midterm exams



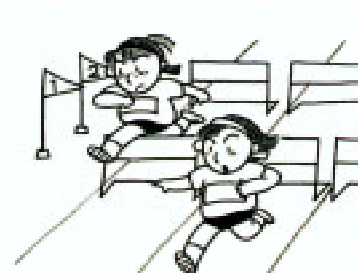
夏 (summer)

夏休み..... summer vacation
中体連 (高校総体)..... a sport tournament
期末テスト..... end-of-term exams
キャンプ..... camp
花火大会..... a fire work display
盆おどり..... a Bon Festival dance



秋 (fall)

体育大会..... a school sports day
文化祭..... a school festival
遠足..... a school outing
修学旅行..... a school trip
登山..... mountain climbing



冬 (winter)

冬休み..... winter vacation
クリスマス..... Christmas
元旦..... New Year's Day
スキーをする..... ski



(解答欄が足りないときには、この用紙の裏に続けて書いてください。)

英語に関するアンケート調査

佐賀県教育センター

皆さんへのお願い

英語の調査への御協力、ありがとうございました。調査の分析の資料として利用させていただきますので、下のアンケートに回答してください。

このアンケート調査は、あなたの学校の成績には、全く関係ありません。あなたの名前が出ることもありませんので、自分の思ったとおりに、正直に答えてください。

- あなたは、英語が好きですか。最も近いものを1つ選び、 を付けてください。
とても好き まあまあ好き あまり好きではない 全く好きではない
- あなたは、英語が得意ですか。最も近いものを1つ選び、 を付けてください。
とても得意 まあまあ得意 あまり得意ではない 全く得意ではない
- あなたは、授業以外で1日平均どれくらい英語を勉強していますか。(塾を含む。定期テスト前などの特別な学習時間は除く。) 1つ選び、 を付けてください。
全くしていない 30分未満 30分～1時間未満 1～2時間未満
2時間以上
- 英語の授業では、どのような活動が好きですか。 あてはまるものすべてに を付けてください。
単語を先生やCD(テープ)の後について読む 教科書を声を出して読む
先生(ALTも含む)の英語での話を聞く 先生と英語でコミュニケーションをする
身近な内容について友達と英語で話す 友達との英語でのインタビューゲーム
自分の考えている内容を英語で書く 教科書の本文の内容理解
教科書以外の英文の内容を読み取る
その他()
- あなたが英語で書かれている手紙や文章を読んだり、自分の考えを英語で表現したりするときに、困るのはどのようなことですか。 あてはまるものすべてに を付けてください。
単語が分からない 英語の文の組立が分からない
辞書(和英・英和)の引き方が分からない 書かれている内容を読み取るのに時間がかかる
書かれている内容(考え)が理解できない 伝えたいことを表現するのに時間がかかる
伝えたいことが思い浮かばない
その他()
- この調査問題を解いて、難しいと思った問題、おもしろいと思った問題、意外に思ったことなど、あなたが感じたことを自由に書いてください。
